

Jpn. J. Ent., 65(4): 856. December 25, 1997

新 刊 紹 介

『ニホンミツバチ誌』岡田一次著, B5判, 86頁, 1997年5月20日発行, 玉川大学出版部, 2500円.

1990年の6月に同書名の著書を岡田先生から頂いている。その自費出版された著書を開いてみて、学者離れした写真の美しさ・正確さに圧倒された記憶がある。7年後、箱入りのハードカバーから装いを変えて、先生傑作の「自然巣と仏さま」の写真が表紙になったソフトカバーとなり、岡田先生の88歳を記念して、このたびの発行となった。ハチに長く接していると、単なる語呂合わせとはいえ、8字が並ぶと何となく嬉しくなる。

内容は自費出版のものほとんど同じ（ただし、今回は *english contents and explanations* が追加された）なので、一部の人には新刊ではないが、このよくまとまった著書が多くの人々の目にふれるようになるのは実に喜ばしい。

本の構成は、写真を主体とした解説で1頁か見開き2頁にまとめられており、読みやすい。最初のところで、ニホンミツバチの自然巣について解説し、続いて、南から北へ日本各地での飼養のようすを、ご自身の体験をもとに述べられる。そして、見事なカラー写真が4頁続く。その後はコロニーの生活史、働きバチのさまざまな行動・習性、とこのあたりがこの本の圧巻であろう。最後が天敵の話であるが、セイヨウミツバチと共通の部分も多い。

あまり構えずに次はどんな写真が出てくると楽しみにして頁を繰っていくと、自然にニホンミツバチ通になれる、というのがキャッチフレーズかもしれない。著者のミツバチへの愛情も伝わってくる。各解説文の最後に「掲載誌」とあることが多いので、過去に書かれたもののように思ってしまうが、大半は「文中で引用したものの掲載誌」の意味である。

7年前に自費出版物を頂いた者の感想としては、各項目ごとに「後記」を追加するか、最後に新しい知見の数頁がほしいような気がする。岡田先生ご自身でなくとも弟子筋の方々のフォローがあってもよかったのではないか。

ニホンミツバチは日本の風土に適応して住み着いている蜂である。ニホンミツバチについてまとめられた最初の本書を手にして、庭の花で忙しく働いている働きバチへ向ける目を少し変えてはいかがであろうか。(大谷 剛)